

**【子どもの心を育てる、その2、過保護】**

10代20代の若者が起こす凶悪犯罪が連日のように報道されています。教育現場で「学級崩壊」という言葉を聞くようになったのもこの数年間のことです。子どもたちの間でさえ人間関係の歪みがあることは「いじめ」の問題が象徴しています。学校に行かない、定職につかないといったニートの若者が増えているのは、決して景気の悪さや就職難ということだけでは語れないようです。「キレル」「ムカツク」「ジコチュウ」「夢がない」「希望がない」「やる気がない」といった子どもと若者が増えている実情を放置できません。これからの日本と世界を背負って立つ子どもたちは、「将来に向けた計画・展望や夢」を持ち、「自主性・主体性」「独創性」「やる気」「集中力」があり、しかも「他人への思いやり」と「共感力」が持てて、物事をやりとげる「幸福感」「達成感」を感じることができる「豊かな心」をもつ人間に成長してもらわなければなりません。

子どもとどのように接すればよいのか戸惑っているお父さんお母さんに、院長が小児科医として、また子育ての先輩として、前号に引き続いて院長の思うところを話してアドバイスしてみたいと思います。

＜遊べない子ども、遊べない親＞

休み明けに受診した子どもに「お休みの日は何して遊んでたの？」と訊ねると「テレビ・ビデオを観てた」という子どもが多いです。それ以外に「パパとテレビゲームしてた」「USJに行ってきた」と答える子どももいます。「川で遊んだ」「キャッチボールした」「紙飛行機をパパと作って外で飛ばした」「〇×ちゃんたちと公園で遊んだ」という屋外での遊びは案外と少ないようです。お父さんとテレビゲームをしても、それは遊んでいたとは言えません。子どもはお父さんとゲームをしているのではなくあくまでもモニター画面を相手にゲームをしていて、お父さんと遊んでいることにはならず、それはお父さんにとっても同じことなのです。テーマパークに行くのはいいのですが、ただ行って乗り物に乗ったりするだけでは遊んでいるとは言えません。

実は今のお父さんお母さんの世代は「遊び」を経験している人が少なく、子どもとの遊びが分からない人が多いようです。今の祖父母の世代は、戦後の日本の高度成長を支えてきたエコノミック・アニマルと外国から称された企業戦士たちの世代であり、土日も仕事をしてサービス残業が当たり前の働きづくめの世代です。当然、平日はもちろんのこと休日にも子どもと接する機会が少なかったのです。これと並行して、大阪万博以降、日本の各地にテーマパークが作られて、たまの休みにはそういったテーマパークに連れて行こうという「家族サービス」という言葉が生まれてきた経緯があります。また、テレビゲームが家庭に進出したことに加えて、空き地は減る、交通量が増えて道端では遊べない、と日常的に遊ぶ場所も減ってきたと同時に、子どもたちが習い事や塾に通うようになって近所の子どもたちの遊び集団が減少し、ますます子どもたちの遊びが屋内志向になりました。今のお父さんお母さんの世代は、まさしく日本の高度成長の中での子どもを取り巻く環境とそれに伴う遊びの変化の中で育ってきたのです。遊んでもらっていない子どもは大人になってから子どもと遊ぶことができないのです。体験していないと、自らが具現化することが困難になる一例とも言えます。ですから、お父さんお母さんは「子どもと遊ぶ」ということをかなり意識しなければならないかもしれません。

ところが「遊ぶ」ということのためには、単に何かをして遊ぶというだけでなく「遊び心」がなければ本当の遊びができません。この遊び心というものを説明するのはなかなか難しいですが、ある例でお話してみます。とある地方の児童館で「現代版わらしべ長者」という遊びを子どもたちがしました。「わらしべ長者」は皆さんもご存知の昔話ですが、なまけもの若者が藁を一本もって家を出て虫をつかまえて先につけて持っている、高貴な家の若様がそれをみて欲しがったので物々交換したら、その後も多くの人と次々と交換することができて、最後には大金持ちになったという内容です。これをやってみようということになったのです。子どもたちは一人に一個の飴玉をもらい、6人ずつのグループに分かれて近くの民家を訪ねたり歩いていて出会った

人に、物々交換を申し出るのです。この時に、門前払いをした人も多かったのですが、中には子どもたちのその遊びに付き合っただけで、別の物に交換してくれた人もいました。門前払いの人には遊び心がなく、交換に応じてくださった人には遊び心があります。遊び心のない人たちは「子どもだけで、そんなことをさせて、どういうつもりか」「そんなバカなことはしないでもっと別の遊びをしたら」という反応がほとんどでした。大人が目から見ればくだらないことでも、子どもにとっては楽しいことはいっぱいあります。昔、院長が小学生の時に牛乳瓶の紙蓋を集めるのが同級生の中で流行っていました。それを聞きつけて近所のおじちゃんが集めてくれたのですが、ある日ヨーグルトの瓶の蓋を手渡してくれるときに「これ、ちょっと大きゅうてカッコええやろう」と言ってくれました。話のわかるおじちゃんやなあ、と子ども心にも思いましたが、このおじちゃんにも十分遊び心があったのです。大人は、かつて自分が子どもであったことを忘れてしまい、自分の価値観を子どもに押し付けることが多々あります。遊び心を持っている人は、大人目だけではなく子どもの心で接して、面白さを感じ取り興味を持つことができる人だと思います。

<読み聞かせと子守歌>

女流歌人の俵万智さんは小さいときに、大好きな絵本があつて1年間くらい毎日それを母親に読んでもらっていたそうです。俵さんのあの表現の豊かさの基盤を作ったのは、この読み聞かせがあつたからなんだ、と改めて読み聞かせの重要性を再認識させられました。同時に、同じ絵本を毎日読み聞かせてあげたお母さんもすごいなあ、と思います。というのは「またこの本なの」「面白い本は別にもあるよ」などとは決しておっしゃらずに同じ本を毎日読んであげたのですから。子どもの持っている価値観をそのまま受け入れて実践する姿勢には、見習うものがあります。

絵本は子どもが読むものではありません。読み聞かせてあげるものです。文字が少し読める幼児の場合、一生懸命に眼は字を追いかけています。字を読むことに集中して、せっかくの絵を楽しめません。読み聞かせた場合、子どもは耳から話が入ってきますが、同時に視覚で多くの情報を入れて、頭の中で絵本の世界を創り出します。例えば、有名な桃太郎の出だしの部分で「昔々あるところにお爺さんとお婆さんが住んでいました。お爺さんは山へ柴刈りに、お婆さんは川へ洗濯に行きました」の部分で、そのページの絵の中には、文章以外の事柄がたくさん描かれており、子どもはその「絵を読んでいる」のです。柴刈りに行くお爺さんが描かれているなら、どんな服装か、頭に被っている頭巾の色と形は、腰にぶら下げているのはどんな鉈、背負っている背負子はどんな形か、歩いてゆく道は真っ直ぐか曲がりくねっているか、山はどんな山か、木にとまっている鳥はどんな鳥か、空は雲っている・晴れている・お日様は、などなど、絵の中に描かれているものをすべて見ながら話を聞いています。自分で字面を追うならそういったことが不十分になります。子どもの頭の中では、山へ行くお爺さんの姿は、その絵本の挿絵の通りではなく、二次元から三次元にもなりますし、しかもアニメのように動いてさえいるのです。このように頭の中で、視覚・聴覚を通じて得た情報が組み立てなおされて、その子どもの独自の絵本の世界が広がります。そして、お母さんお父さんとの言葉のやり取りや共感もできます。これに対してテレビやビデオは、映像がどんどんと勝手に変わっていくので、こういった頭の中での組み立てなおしという過程ぬきで見ているだけです。そこには送り手と受け手との間のやり取りはなく、映像と音声の一方通行になっているのです。

絵本の読み聞かせが子どもに大きな物を与えるか、という別の例をお話しましょう。あるお母さんに3人の子どもがいたのですが、この人は子どもたちが赤ちゃんの時から毎日のように絵本の読み聞かせをされてきました。この方が、末っ子が幼稚園児の時に、若くして癌で亡くなりました。その方の七回忌の時に、3人の子どもたちが仏壇の前でそれぞれ一冊ずつ絵本を持ってきて読んでいました。「絵本が好きなんだね」と声をかけると、小学6年になった末っ子の男の子が「この絵本を見てるとお母さんの声が聞こえてくるから」と答えました。この答えは衝撃的でした。その子の中では、絵本とともに母親が生き続けているのです。子どもにとって母親は存在自体が大きなものですが、この子どもたちにとって絵本という媒体によってさらに大き

な親子関係が築かれています。

絵本の読み聞かせをしてもらった子どもたちは、情感が豊かになり、国語力も増します。いわゆる行間を読む、ということもできるようになるのです。情景を捉えてそれを言葉という道具で豊かに再現できるというのは、最初にお話した俵万智さんが良い例です。もし、絵本の読み聞かせをしていて、毎日のように同じ本を読んでもくれとせがむようになれば、その子どもは素晴らしい世界に身を委ねているのだと思ってください。その子は毎日きっとお気に入りの場面があるはずです。それはお気に入りの絵なのか、お気に入りの情景なのか、お気に入りの台詞なのか、あるいはお母さんの読み方でお気に入りの言い方があるのか、どれなのかを考えるだけでも、お母さんがその子と共感しようとしていることになります。

絵本以外で大切なことで、院長が若いお母さんたちにお勧めするのが、子守歌を聞かせてあげることです。CDなどを聞かせるのではなく、お母さんが自分の声で歌って聞かせてあげることです。これも子どもたちに大きな影響を与えます。私事ですが、院長の息子は、赤ちゃんの時からずっと子守歌を歌って聞かされていましたが、その曲がたまたま大学入学式のあとのクラブ紹介の時に合唱部によって歌われ、息子はそれが自分が歌って聞かせてもらっていた子守歌だとすぐに気づいたということです。ちゃんと憶えているんですね。ちなみに息子は合唱部に入部しました。母親の声が、叱る声だけではなく、そこに優しさが十分に含まれていることを、子どもの頭の中に染み込ませることは大切なことだと思います。

<思ったことを言えない、話が聴けない>

31号で、院長が診察室で多くの子どもたちをみてきて、自分で自分のことが言えない学童・中高生が増えているということを申しました。そこには、親による言葉の先取りがあることも述べました。

お父さんお母さんは、何かとても辛いこと悲しいこと嬉しいことがあってそれを友達や配偶者といった相手に伝えて分かってもらおうと思ったとき、どうされますか？ただ、そこで泣いて絶叫するだけでは何も相手に伝わりませんし、もとより相手にされません。では、どうするかといえば、どういう状況でどういうことを言われたあるいはされたあるいは経験したということと、その結果自分がどのような気持ちになっているのか、を相手にうまく伝えるために、的確な言葉選びと話の組み立て方を頭の中で整理してから、音声としての言葉を口に出してゆくとします。その際に、淡々と話すのではなくそこに感情が込められた口調や身振り手振りも加わるとします。人間は、これを瞬時に頭の中で行っているのです。言葉を覚えた幼児が次第に語彙を増やしてゆくのは、自分の考えをいかに相手にうまく伝えれば良いかということが根底にあるからです。黙っていても何でも目の前に欲しいものが出てくれば、要求するための言葉は不要になります。「メシ」「風呂」「寝る」だけで日常生活に支障のない頑固親父は別としても、自分の意見、考え、要求はきちんと言葉にして表わすことができこそ、人と人との関係がうまくいくとします。病気になったときの自分のことが説明できない、口にすることさえしない子どもたちは、言葉を先取りされていては、相手に自分で伝える必要がないので、うまく言えなくて当たり前なのです。自分のことをうまく表現できない理由は、単に言葉取りをされているからだけではありません。そこにはメディアの影響が大きいと思います。幼児期からテレビ・ビデオを見放題で育つと、そこには言葉のやり取りはなく入ってくるだけで出す必要がないのです。情報や知識として語彙は増えますが、それを頭の中で自分の考えをうまく言うためにきちんとした言葉には変換されないのです。言葉のやり取りをする機会の少ない子どもは、自分の意見をうまく相手に伝えることができません。その他の要因も相まって、自分の置かれている状況が判断できない子どもで、しかも言いたいときに出し抜けに言う子が集団になるとどうなるのでしょうか？これが学級崩壊の基本的な姿に繋がっているのです。話を聴いてもらえなかった子どもは、人の話に耳を傾けることが苦手です。体験しなかったことを、具現化することは難しいのです。

子どもが何かを言おうとするとき、お父さんお母さんは、子どもを急かさず待ってあげてください。そして全部言う前に言葉をさえぎらないでください。子どもが言いたいことを全部言わせてください。そうすることによって、子どもはきちんと自分の言いたいことを伝えるということを繰り返すことができ、徐々に相手にう

まく伝えられるようになります。また、自分の言っていることをしっかりとお父さんお母さんに「聴いて」もらっている、と感ずることが出来ます（「聞く」と「聴く」は違うことに注意）。聴いてもらった子どもは、人の話が聴けるようになるのです。親の背中を見て子は育ちます。

<放任・過干渉共存型過保護>

いつの時代も親は良かれと思って子どもを甘やかすことが多いようですが、最近は「放任・過干渉共存型過保護」の傾向が強いです。これは何も保護者だけに限ったことではなく、学校の教師にも当てはまることです。放任・過干渉共存型過保護はどういったことか、列挙してみましょう。①子どもが自分ですべきことまで手を出し、世話をする、②子どもに過剰のものを与える、③子どもの欲求や要求を安易に受容する、④子どもを必要以上に挫折や困難から保護する、⑤子どもに家族の一員としての役割（手伝い）を与えない、⑥良いこと、悪いことなど子どもに教えるべきことをしっかり教えない、⑦子どもをほめたり、認めてやるべき時にそれをあまりしない、⑧子どもの生活や行動に過度に干渉する、⑨子どものしつけや教育を学校や学習塾などに任せる（外注教育、出前教育）。どうでしょうか、どれが放任でどれが過干渉かはお分かりだと思います。当てはまる点はありませんか？

前号でも述べましたが、豊かな心を育むためには、幼児期に脳の前頭連合野という部分をいかにうまく伸ばすかが鍵になっています。この前頭連合野の伸びを阻害するのが「放任」と「過干渉」です。つまり、前述したいいくつかの点を意識して、その逆を行うようにして子どもに接すればよいのです。同時に、子どもをよく遊ばせること、特にお父さんお母さんが一緒に遊び心をもって遊ぶこと、その時にできるだけ屋外で自然に触れることも必要です。幼児期には「教育」ではなく「遊育（遊んで育てる）」が必要です。そして、乳幼児期から読み聞かせや子守歌を歌ってあげて、しっかりとした言葉のやり取りをして、しかも子どもの言うことをじっくり聴くということが大切です。遊びと体験が重要だということです。

具体的なことを下記に列挙してみます。これならできそうだと、と思いませんか？



1. 基本的な生活習慣など、子どもが本来「自分ですべきこと」「できるはずのこと」には手を出さず、やり方を根気強く「教え」て「まかせ」、愛情をもって「見守る」ようにすること。そして、生活リズムのきちんとした子を育てるようにすること。
2. 食べ物、飲物、衣類、おもちゃ、学用品、本、雑誌、お小遣いなど、物を必要以上に与えないようにすること。
3. 子どもの要求・欲求を安易に受容しないこと。また受容するとしても場合によっては少し待たせ、時間をおくようにすること。
4. 家族の一員として家庭の中で年齢に応じた役割（手伝い）を与えること。ただし、その際、原則として金銭や物による報酬は与えないこと。
5. 人として「してはいけないこと」をした時は、その場でしっかり注意し、望ましいあり方を教えてやること。また、人として「積極的にすべきこと」についても日頃からきちんと教えてやること。
6. 勉強だけでなく、その子なりの伸びや良さにも積極的に目を向け、認めるべきことは認め、ほめてやるようにすること。適切な賞賛は子どもの自尊感情・自信を高める。
7. 子どもの生活や行動に対しては、危険を伴ったり、道徳やしつけに反する行動でない限り、干渉し過ぎないようにすること。
8. 幼い時から学習塾やお稽古事などに子どもの教育を任せる「外注教育」をできるだけ控えるようにすること。そして、親自身が愛情をもって育てるようにすること。